

6 と畜場でみられた肝蛭の異所寄生

○塚田真樹^{ツカダマキ}(豊橋市食肉衛生検査所)

松田克也(")

瀬尾幸嗣(")

1. はじめに

肝蛭症は、牛、めん羊、山羊の他、馬、豚、人など多くの哺乳類に発生し、過去には我国でも人肝蛭症の集団発生が報告されている。肝蛭は、本来、動物の胆管に寄生する吸虫であるが、幼若虫が気管支等に迷入することがある。今回、肝蛭の肺への迷入を疑う牛3例(全て交雑種、去勢、30ヶ月齢)に遭遇し、各肺病変を比較検討したのでその概要を報告する。

2 検査結果

(1)肉眼所見:全ての症例で胆管内に肝蛭虫体を多数認めた。また、一部の肺胸膜が肥厚し白色を呈し、内部に硬結した結節を触知した。結節部の断面は結合織の増生により乳白色を呈しており、周囲の間質結合織は肥厚していた。結節の部位と大きさは、症例1では左肺後葉の尾側に10×8×5cm、症例2では右肺中葉辺縁部に6×4×4cm、症例3では右肺後葉辺縁部と左肺後葉横隔面にそれぞれ約1×1×1cmであった。症例1では結節内に一隻の虫体を確認した。症例2では結節中央に緑色の膿瘍を、症例3でも小膿瘍を認めた。

(2)組織所見:全症例の肺病巣の細気管支内に好酸球を主体とする膿を認め、間質には好酸球が浸潤し、線維芽細胞が増生していた。症例1、2では細気管支の周囲に主に好酸球、リンパ球、形質細胞が浸潤していた。また、細気管支以外で好酸球、形質細胞、マクロファージなどの集簇とこれを取り囲むように線維芽細胞が増生していた。症例1では虫体の周囲に好酸球、リンパ球の浸潤とヘモジデリンの沈着がみられた。症例3では細気管支の周囲に好酸球、リンパ球が浸潤していたが、形質細胞はみられなかった。また、症例1、2でみられた炎症細胞の集簇も認められなかった。

3 まとめ

全症例ともに細気管支内に好酸球を主体とする膿を認めたことから肝蛭の肺への異所寄生であると考えられた。肺の病変部で幼若虫を確認できたのは1例のみであったが、これは肺に迷入する虫体の数や本来の寄生部位以外では長期に存在できないことなどによると推察された。今後は肝臓に肝蛭の寄生がみられ、肺に結節性病変を認めた場合は肝蛭の迷入を視野に入れた検査が必要であると考えられた。